

林脩己先生と花卉園芸

小 泉 力

これまで2回にわたって林脩己先生の業績について述べましたが、今回は花卉園芸関係について紹介します。

林の生涯を俯瞰して見ると花卉園芸を一本の筋として、20歳から70歳まで明治・大正・昭和へと時代の変化に対応して活動し、主要な時代は園芸専門学校時代まで続いた。千葉県立農事試験場に転出してからは庭園は業務外であり能力を十分に発揮できなくなったが、農事試験場安房分場の設立を提言し実際に陣頭指揮をとって完成させており、庭園の知識が発揮された。これと並行して園芸専門学校講師時代から取りかかっていた成田山公園の設計と完成は林として最大の業績となった。

予め紹介しておく資料に林が書いた論文「庭園に就て」がある。55,740字の長文である。本文は成田山仏教図書館の林脩己氏文庫に収納されており花卉に関する記述がある。また当文庫には「牡丹芍薬図譜」147枚があり、これも林が描いている。

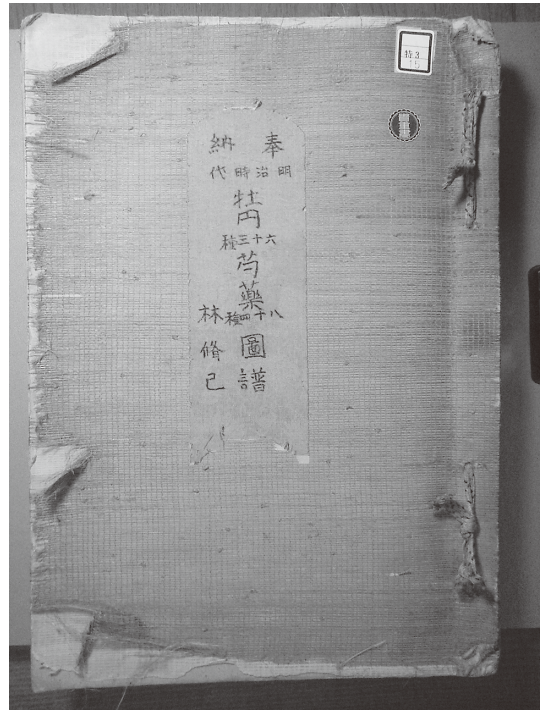
林の経歴は初めに新宿御苑で福羽逸人により園芸界での活躍の場を与えられ、次に政界の重鎮で園芸趣味の総理大臣・大隈重信伯爵に信頼され、大隈邸の園芸主任を勤めた。更に、三菱財閥の岩崎彌之助からスカウトされて英国留学の機会を得て米国・仏国も視察した後に岩崎邸園芸主任を勤めた。その後、千葉県立園芸専門学校設立に伴い講師となり、教育者として人材育成に尽力した。中でも新潟の教え子から請われたチューリップ産地形成の指導は主な業績である。

大隈重信が日本女子大学校に寄付した模様花壇と林脩己

昨年NHK朝の連続ドラマ「朝が来た」が放映され日本女子大学の創設に関わった広岡浅子の物語がある。1901（明治34）年に日本女子大学校が開校した時、園芸好きな大隈重信は花壇を寄贈している。しかし暴漢により片足を失っており口頭で指示をしたと思われる。そこで誰に現場を施工させたかといえば当時大隈邸の

園芸主任をしていた林脩己が有力である。同大学ホームページの写真をみると中央に丈の低い草花4～5種類を植えた模様花壇があり、その外周に牡丹芍薬らしき草丈のものがある。これが日本初の模様花壇であろうか？

牡丹芍薬図譜について



牡丹芍薬図譜（吉岡賢人氏撮影のデジタル写真による）

成田山仏教図書館に林脩己氏文庫がありこの中に美しい「牡丹芍薬図譜」がある。その表紙には次のように書かれている。

奉納 明治時代 牡丹六十三種 芍薬八十四種図譜
林脩己

この図譜は明治時代の品種図鑑として描いたと考えられるが、何所にこの牡丹芍薬園が在ったのだろうか？

明治時代に林が所属していたのは新宿御苑、大隈重信邸、岩崎彌之助邸（高輪別邸/現開東閣）、千葉県立園芸専門学校であるが、最も可能性があるのは岩崎邸であろう（明治39～42年/勤務）（32～35歳）。

高輪別邸の牡丹園が薔薇園に替ったとされるので、品種の逸散を惜しんで描いたと考えたい。牡丹六十三種 芍薬八十四種 合計147種を春の一時期に描き上げるとすれば、次々に咲いてくる花を不眠不休で描かなければ不可能であるが、岩崎邸での勤務状態において自由な時間を持てたならば可能であろう。

表紙をつけて綴じたのは寄贈に際して行ったと思われるが「林脩己」の署名は林の自筆であり「奉納」と書かれているのは成田山新勝寺不動尊への信仰心によるものと考えられる。



初鳥（吉岡賢人氏撮影のデジタル写真による）

絵画中、筆書きの品種名の文字が達筆なのは30歳代の若い時の書体で、表紙の書体はやや丸みを帯びている。牡丹芍薬図譜は日本画的描写であり、林は若い時代に習ったと考えられるがその記録はない。

一方、英国留学中に英国王立園芸協会の機関誌 The Garden に英文で日本の菊を紹介した投稿には、菊の図が掲載されており、これを見ても林に絵画能力があったことは明らかである。

林脩己の花壇

花壇という用語が最も早く使われたのは公家等が室町時代から行なっていた菊花壇であろう。これは鉢で育てた菊を雨除けや装飾用の幕でしつらえた場所に幾何学的に配色して観賞する日本の伝統的な園芸展示法であり、現在でも新宿御苑をはじめとして全国の菊花展で行われている。林も最初に新宿御苑でこれを習得した。欧米の花壇については福羽逸人から聞く機会があったと思われる。

大隈邸では菊花壇が造られて観賞会が行われていたが、庭園のどこかに花壇（flower bed）があったという記録は見当たらない。

英国で見た花壇

英国に渡りロンドン市内の花壇の美しさに驚嘆し長岡安平への手紙に公園の花壇についてこのように記載している。

「園内各所に花壇の設備ありて、美麗なる花卉を植付けあり（尤も春期より秋期に至る間）、又、市民何れも公德心に富み、園内に於る花卉を盗むが如きこと絶へてなく、其僻随分高価を拂ひて美なる花を購ひ、以て之を襟挿しとなし居れり」。

日本では家の前を地味にする国風であるのに対し欧米では派手な花色で装飾している。花壇についてはキューガーデンで学んだと考えられる。

英国の花壇については「庭園に就て」の文中にロンドン市内のケンジントンパーク、ハイドパークの名前を上げているが、市内に居住していれば当然足を運ぶ公園であり、ここでは様々なタイプの花壇を見る機会があったであろう。しかし、文中には花壇に関する記述はなく、公園の目的について今日と同じ内容が100年前既にケンジントン公園で完成していて、その事例を上げている。フランスに渡り、ヴェルサイユ宮殿を見てその華麗さについて解説しているが、特にフラワー・ベッドについては触れていない。

林は千葉県立園芸専門学校就任にあたり松戸のキャンパスに日本で最初の本格的西洋式庭園を構築しようとの理想を画いた。地形を見て校舎前面の傾斜地をイタリア式庭園とし、刈込み樹種を植え、平坦地にフランス式庭園を設け、芝生に花壇を設置し、模様花壇を作ったと考えられる。正門右側の眺望の良い平地にイギリス式風景庭園を設けた。更に日本式岩石庭園も造庭した。

林が英国に留学した当時ガートルード・ジーキル等がボーダーガーデンを考案していたのでこれを見ていた可能性がある。しかし、林は帰国後にボーダーガーデンを造った形跡は無い。ボーダーの概念は学んで来たように校舎玄関前に山採りの植物を使って学生にボーダーを造らせている。そのことは「母校の歴史を語る会座談会」（昭和17年5月24日 午後2時 於母校会議室）で岩田喜雄氏が「明治43年に前庭の土工をなし斜面の寄せ植えを作りました。植物は山から採って来たもので林先生が建物を引き立てる為に作られました」と発言している。このボーダーは現存し80種の植物が数えられると藤井英二郎教授が述べている。英国で見たと思われる長大なボーダーガーデンは当時の日本においては場所も材料も無く造成は考えられなかったであろう。

しかし、明治44年5月に千葉県庁落成式に千葉県立園芸専門学校が出展した室内装飾花壇は、英国のボーダーガーデンの考え方をコンパクトに取り込んだ設計で数十種類の植物を組み合わせたデザインであった。これを堀江正章が油彩画として残しているが、当時としては来客を呼ぶ画期的な花壇であった。

林が欧米で学び岩崎邸で造成したのは、広大な芝生庭園で欧米風の斬新華麗なデザインであったが、雇用主岩崎彌之助の死去によって林は退職し、その後千葉県立園芸専門学校の設立に参画した。

林脩己の色彩論

花壇の色彩に関して次の文章がある。

「毛氈花壇等に描いて、多色彩の調和保つ時は見る人をして如くも華花艶麗なるものかとの感を惹起せるものである」

このように欧米留学中に見た模様花壇の美は林の花壇に対する色彩感覚に多大な影響を与えていたと考えられる。

林は「庭園に就て」の中で色彩について詳しく論じ

ている。一つ目は色彩環と同様の図面を描き、色を原色、第2原色、第3原色に分け、原色を赤・青・黄とし、その中間の紫・緑・橙黄色とした図を描いて解説している。

二つ目は2色を対比させて影響しあう色の美妙的な変化について対照、調和を説明している。赤・黄・緑・青・紫・黒の順に22種を組合せている。例えば「赤と緑を並べると赤はいよいよ冴え、緑も亦純緑を呈する」「黄と青互いにその色を鮮明にす」等の解説をしているが現在の色彩学でも色相対比として説明されている。花壇の花の色を対比させての考察かと思われる。

一方、日本在来花卉及び当時輸入されていた花卉類を色彩別に分類している。日本在来の落ち着いた色彩の種類と外来の派手な草花も含めて明治期当時の種類を列挙しており、単に洋風の花壇だけでなく日本庭園にも対応できる内容である。

東西庭園の差異について

西洋庭園について観察し日本庭園と比較しており、西洋庭園については「規画整然として石像を立て噴水を装置し芝生の中に種々の型の花壇を設け、劃然として幾何的に型に容れたやうな庭園」と述べ、「西洋人の家の前庭は日本の庭園と違って居り、西洋の前庭は普通人道と馬車道とが通して居て、並木が両側若しくは中央に植てあり、芝生には艶麗なる草花が種々の型に造ってあり、尚その上に立像を設け噴水の装置もあつて此處に足を踏み入る者は居ない」とある。

花壇について「感嘆の声を漏らさしむる迄に華麗に且つ艶麗に造つてある、日本で偶々前庭があつても斯くまで華麗なものではなくて、多くは玄関に至る通路に挟まれた芝生に数本の樹木が植はつて居る位のものである、而して西洋の前庭は斯く華麗なるものに反して其の後庭は極めて自然で且つ樸素の趣きを供へて居るのが普通である」としている。

東西庭園の差異を次のように集約している

西洋庭園	
1	逍遙に適すること
2	庭石を余り使用せざる事
3	前園華麗後園素朴なる事
4	特色ある一景を一庭に作る故に広壮なる事
5	床高きが故に水平線高し
6	全園の統一に注意する事

日本庭園	
1	座して眺望に適する事
2	庭石を多く使用する事
3	前者と正反対なる事
4	一庭に多数の景を包含する故にこせこせして見ゆ
5	床低き故水平線低し
6	一部分部分に注意を払ふ事

以上のように東西庭園の比較から花卉の使用にあたって日本では控えめに、西洋では派手に飾る気風の違いを述べている。日本では戦後のガーデニングブーム到来まで地味な気風は続いていた。

千葉県立園芸専門学校と県立農事試験場の関係

千葉県立園芸専門学校と千葉県立農事試験場との関係は、校長と場長を鏡保之助が兼務しており、林も兼務していた。当初、農事試験場は中山村（現在の船橋市）に在ったので林はこの近所に居住しここから松戸に通勤していたと考えられる。

赤星校長の時代に中山村の試験場の土地を売却し、その金で松戸の学校の隣接地に土地を購入し、農事試験場は園芸専門学校に併設された。その後試験場は1922年（大正11年）千葉市内へ移転した。

（以上の経過は千葉大学園芸学部創立100周年記念誌「戸定ヶ丘の時空百彩」によった）

千葉県立農事試験場での研究

（中山村時代 現船橋市）

最初の試験場報告は明治42年度業務功程がある。これには花卉の部として試作している草花は下記の種類である（なお花卉の表示は以後原文に従っている）。

「キャンディタフト、百日草、デージー、伊勢撫子、天人菊、矮性葵、スイートピー、パンジー、美女撫子、八重石竹、ヂギタリス、フロックスドラモンディー、貝細工、アラセイトー、金盞花、カーネーション、金けい草、花菱草、糸桔梗、ダリヤ、アネモネ、アルターナンセラ、シネラリヤ、金魚草、スターフロックス、ペチュニヤ、虞美人草、美女櫻、マリーゴールド、水仙翁、向日葵、翠菊、小判草、ヒヤシンス、チューリップ、ロベリヤ、カンナ」である。

これらは林が試作したものと考えられる。

千葉県立農事試験場転勤後の花卉園芸について

林は大正12年に千葉高等園芸学校を退職し、千葉県技師園芸部長となった。千葉県は東京近郊の園芸生産県であり、職員には教え子の山川峯吉（大正9年卒）と渡辺誠三（大正10年卒）がいた。千葉県の園芸は野菜と果樹が主体で、花卉園芸は房総地方で露地栽培が行われる程度であった。

房総の花弁栽培の歴史は古く、景観の美しい場所に別荘を設けるY伯爵が居留してガラス温室を設け花作りを楽しんでいたのが、西洋の花を見る機会があった。和田地区は狭小な田畑に頼る農村であったが花の産地

化を始めた先覚者が居た。

農事試験場の業務報告を見ると、林が本格的に花卉試験に取りかかったのは、園芸学校を退職し千葉県に移籍した大正12年度からである。この年から継続して花卉試験の報告があるが、昭和12年度からは花卉の報告が消えている。即ち戦時体制に入り花卉栽培の禁止令に至る措置が始まったと考えられる。

林が転勤した大正13年（1924）から昭和元年（1926）迄の成績書を見ると、多くの花卉試験が精力的に行われている。特に房総地方で現地試験を行い、間宮七郎平らの先覚者に対し委託試験を行っている。有望な露地切り花を選定し、その経済効果を判定している。また草花種子を採取し配布している。

主な試験内容は次の通りである。

花卉経済的試験

42種類を栽培しその生産量と価格を調査して販売成績が最も優秀なものは、浜菊が反（10アール）当たり241円、ジャスターデージー234円、小浜菊、鋸草がこれに次ぎ、最も不良はアヤメの35円としている。

栽培した種類はアヤメ、アスチルベ、ジャスターデージー、ハマギク、コハマギク、ノコギリソウ、ヨメナ、トリトマ、モントフレジャー、アズマダチソウ、キンケイギク、キリンソウである。

予備試験としてグラジオラス、ダリヤ、ヒヤシンス、水仙、カーネーション等を試作し、カーネーションは376円、ダリヤ271円を得たとしている。

薔薇品種比較試験 41品種

牡丹品種比較試験 40品種

また、牡丹品種比較試験40品種について比較試験を行い、最も優良な品種4種、優良品種20種、不良品種16種を選別している。

グラジオラス植込み時期試験

花卉採種に関する試験

ガラス室内での花卉試作

耐寒性を見ているが、カーネーションが最も強くシネラリヤ、ゼラニウム、バビヤナ、イキシヤ、フリージャは弱かったとしている。

房総暖地地方の産地化に対して積極的に現地試験地を設定して指導を行っている。

「奨励花卉促成指導」として特に先進的農家を選び
実地指導を行っている。

「副業奨励花卉促成栽培指導地」として下記の3農
家を選定して、「黄房咲水仙 アイリス 早生吾妻
チュリップ アネモネ アスパラガス 毛百合 春咲
グラジオラス ゼラニウム」の栽培を委託している。

保田町元名 吉岡欽二郎
北条町 岩崎廉
和田町 間宮七郎平

試験場報告を見ると、園芸部長として果樹・蔬菜に
も目配りしつつ花卉試験を行っている。当時導入され
ていた花卉の種類と比較を行い将来の産地化に備えて
の幅広い研究をしていた。グラジオラスの植付け時期
の試験などは今日でも必要な試験であった。

暖地における最後の業績

暖地における園芸振興の拠点として安房分場の設置
を提言し、自ら先頭に立ち建設を進めたのは、定年を
過ぎた昭和8年59歳の時である。建設時の現地責任
者・佐川美穂（大正15年卒）が「暖地園芸試験場50年
の歩み」に「分場の新設に当っては林先生が主とし
て企画・設計の立案に当たられしばしば現地に赴き準
備交渉に苦勞されました。週に4回来房、御老体にも
拘らず毎日早朝から現場で工事、栽培について熱心に
指導されました」と記録している。

昭和9年11月12日、安房分場開場式が盛大に行われ
た。この時に庁舎前庭は大小の草花を散りばめた花壇
で飾られた。これが林脩己最後の花壇作品となった。



安房分場起工式での県知事（中央）と林脩己
（その左隣）

花は心の食べ物

林は欧米で見て来た花卉園芸や大規模なガラス室群
に較べて、小規模な温室しか建てられなかった戦前の
日本との格差の中で様々な花卉を試作し、でき得る限
りの研究を将来に向けて行っていた。晩年は太平洋戦
争に向かい、英国は敵国となり得意な英語は禁止、優
れた英国の園芸について語る事もはばかれる時代とな
り、終戦の年3月に亡くなられた。林が最後に残した
安房分場の建設は安房地方への大きな影響となった。
花栽培禁止令が行われた中でも和田町の「川名りん」
は、花は心の食べ物と言い、そっと隠して育て戦後を
迎えた。

林の花卉に関する業績は数えきれず、一個の人間が
全ての事に堪能な超人的であった明治時代と、細分化
が進んだ今日との大きな違いを感じている。